

2021年11月21日（日）主日朝礼拝説教

『75歳の老人の旅立ち』井上隆晶牧師
創世記12章1～9節、マルコ1章16～20節

①【アブラハムの決心と旅立ち】

創世記の12章からアブラハム物語が始まります。彼はもともとメソポタミア（今のイラク）にあるウルという都市の出身者です。アブラハムの父親の名はテラとって、アブラハムと彼の妻サラと孫のロトを連れてウルを出発し、カナン地方（今のパレスチナ）に向かいます。もしかしたら神がテラに現れたのかもしれませんが。ウルから北上し、ユーフラテス川沿いに歩いてハランという町まで行き、そこから南下します。ところがテラはハランという町までくると、そこで旅をやめてしまい、そこにとどまり205年の生涯を閉じます。このハランの町というのはバビロニアの文化とパレスチナの文化の接点にあたります。「テラは昔、ユーフラテス川の向こうに住み、ほかの神々に仕えていた」（ヨシヤ 24:2）と聖書に記されています。ウルは月の神への信仰が盛んな地です。昨日も60年ぶりの月食を見ましたが神秘的でした。昔の人たちは、月は欠けても必ず満ちますから、不滅の命を表すものとして信仰の対象にし、武将たちも兜の前立てに立てました。テラは違う世界への入り口まで来て、恐れからかもう一歩が出なかったのだと思います。しかしアブラハムが75歳になった時（テラが145歳の時）、主なる神は彼に現れ「あなたは生まれ故郷、父の家を離れてわたしが示す地に行きなさい。私はあなたを大いなる国民にし、あなたを祝福し、あなたの名を高める。祝福の源となるように。あなたを祝福する人を私は祝福し、あなたを呪う者を私は呪う。地上の氏族はすべて、あなたによって祝福に入る。」（創世記12:1～3）といわれました。すごい約束ですね。これを自分に言われた言葉として聞いたらどうですか。あなたは大いなる国民になり、祝福の源となり、あなたが誰かを祝福すればその人も祝福され、あなたを通してすべての人が祝福に入るといわれたらどうでしょう。この言葉に賭けてみようかな、という気持ちになりませんか。信仰の始まりは、いつも神様からの一方的な祝福への招きなのです。そこでアブラハムは父をハランに残し、ハランで加わった人々と共にカナン地方に旅立ちました。このアブラハムの旅立ちが私たちに教えているのは、信仰とは単なる思想ではなく、実行であり、実践であるということです。教父たちは言っています。

●「信仰は考えることによってではなく、実行することによって得られる。言葉や考察ではなく、体験が神を教えてくれる。窓を開けない限り、新鮮な空気は部屋に入らない。日光浴をしない限り、肌は黒くならない。信仰を得ることも同様である。ただ楽に腰かけているだけでは、私たちは目標に達することはできない。放蕩息子をまねよう。「彼は立って、出発した」（ルカ15:20）あなたを土につなぐ鎖はどんなに多く重くても、それを解くのに遅すぎることはない。アブラハムは出発した時、75歳であったという記録には深い意味がある。夕方になってから

働き始めた労働者たちが朝から働いた人と同じ賃金をもらったのである。…「生まれ故郷、父の家を離れてわたしが示す地に行きなさい。」と主が、アブラハムに仰せになったように、私たちにも呼びかけてくださる。その呼びかけを聞いたあなたは、これからその新しい国の方へ全身を集中しなくてはならないのである。」

神の言葉はただ聞くためにあるものではありません。聞いて行動するためにあるのです。イエス様の兄弟であるエルサレム教会の最初の監督ヤコブもこのように言っています。「み言葉を行う人になりなさい。」(ヤコブ 1 : 22)「人は行いによって義とされるのであって、信仰だけによるものではありません。」(同 2 : 24)「行いの伴わない信仰は死んだものです。」(同 2 : 26) 神の声を聞いたら、まずやってみるのです。安息日を守れ、十分の一を献げよ、絶えず祈れ、隣人を愛せ、敵を赦せ、聖書の朗読に専念せよ、などなど戒めはたくさんあります。出来ることから始めるのです。出来ないことは「出来るように力を下さい」と祈るのです。神はその人が神の言葉を本気で聞いて従ってくるかどうかを見ておられます。従う者には姿を現し、栄光を表して、約束のものを与えて下さいます。

②【信仰の世界とこの世の世界を分けて考えてはいけない】

アブラハムはカナン地方に入り、シケムという村にある聖所(礼拝場所)、モレ(占いの意味)の檜の木まで来ると、主はアブラハムに現れ「あなたの子孫にこの地を与える」(創世記 12 : 7)と言われます。立派な檜の木が「神の託宣を占う木」としてその礼拝所にありました。そこで彼はそこに祭壇を築き、献げ物をします。しかし彼はそこからベテルの東の山に移動し、テントを張って祭壇を築き、神様の言葉を待ちます。しかし神の言葉が下らなかったので、更に旅を続けネゲブ地方へと移っていきました。そこはカナン地方の最南端にあたります。彼はどんどん場所を変えて南下してゆき神を呼びました。なぜでしょう。それは「その地方には当時、カナン人が住んでいた」(創世記 12 : 6)からです。以前、ある方が「聖書の中の世界」と「この世の世界」はまったく違うといっておられました。聖書の世界は夢のような話が出てきます。でも現実の世界はそう上手く行きません。アブラハムもそうだったと思います。神様は土地を与えると約束されたけれども、現実の世界を見たら、その土地にはカナン人が住んでいるし、どう見ても不可能だ、と思ったのだと思います。彼は約束によって動くのではなく、目の前の現実によって動いていったのです。

●マザー・テレサはこう言っています。「私は毎日、二つの聖体拝領をします。第一の聖体拝領は早朝のミサの中で。第二のそれはその後、街の中で。」マザーは道端で倒れて死んで行く人たちの中にキリストを見ていました。更に彼女はこうも言っています。「残念なことは、第一の聖体拝領をする人たちが、第二の聖体拝領をせず、第二の聖体拝領をする人たちが、第一の聖体拝領をしないことです。」つまり、礼拝をする人たちがそれだけで終わってしまい、神の御心を実践しようとしないし、その反対に神の御心を実践している人たちが、礼拝に来ないことはと

でも残念だと言っているのです。

私たちは神の世界とこの世の世界を分けて考えるはいけません。神はこの世の中で働いておられ、いろいろな人たちを通して働いておられます。人の中に神を見なければなりません。教会に来て礼拝をして信仰を養い、その信仰をこの世の中で実践することが求められているのです。

③【判断と決断は違う】

アブラハムはやがて「信仰の父」と呼ばれるようになりますが、今はまだ信仰と現実の間で挟まれてフラフラしています。この後、その地方に飢饉があったのでエジプトに避難し、そこで大失敗を犯すこととなります。彼はエジプト人を恐れ、妻のサラのことを妹だと言って嘘をつきます。妻だと分かると自分は殺されて妻が奪われると思ったからです。サラはアブラハムの妹として王宮に召し入れられ、多くの家畜や奴隷を貰いますが、ファラオと王宮の人々は恐ろしい病気に罹ってしまいます。彼は嘘がバレてファラオに叱責され、エジプトから追放されます。彼は以前テントを張り、祭壇を築いた場所にまで戻ってきます。「そこは、彼が最初に祭壇を築いて、主の御名を呼んだ場所であった。」(創世記 13 : 4) と書かれています。彼は信仰に戻り、礼拝に戻ります。

●早稲田のラグビー部監督を務めて大学選手権二連覇をとげた中竹竜二という人が「判断と決断は違う」ということを言っています。判断というのは過去の出来事について検証することであるのに対し、決断とは未来の事柄について方向性を打ち出すことだといいます。そして「人生を左右するのはたいてい決断であるのに、多くの人は決断すべきことを判断しようとして失敗している」といっています。

「人生を左右するのはたいてい決断であるのに、多くの人は決断すべきことを判断しようとして失敗している」というのは、興味深い言葉だと思いました。

アブラハムがロトに良い土地を譲った時も、ロトたちを救い出しソドムの王に分捕り品を返した時も、13年の信仰のブランクの後、再び神に従う決心をして割礼を受けた時も、アブラハムは信仰によって決断しました。私たちも信仰によって決断してゆく者になりたいと思います。

今日は収穫感謝祭です。私たち自身が神様への収穫物です。良い実を結ぶ者とならなければなりません。どんなに高齢になり、自分の出来ることが減ってきて、可能性がどんどん失われていったとしても、神に従う決断をし歩みを始めるとき、私たちは「祝福の源」になれるのです。手遅れということはありません。夕方5時から働きに出かけた労働者が同じ褒美をもらったことを忘れてはなりません。私たちは神によって必ず「祝福の源」になれるのです。それを信じて希望を持ちたいと思います。